

「令和6年度 全国学力・学習状況調査」の結果について

【富里市立 富里小学校】

令和6年4月18日（木）に、小学校第6学年全児童、中学校第3学年全生徒を対象として、「全国学力・学習状況調査」が実施されました。本校の結果についてお知らせします。

1 児童が受けた調査について

「国語」、「算数」、「児童に対する質問紙調査」の調査が実施されました。それぞれの内容は下記のとおりです。

教科に関する調査

- (1) ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※出題範囲：原則として調査する学年の前学年までに含まれる指導事項

質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

*調査問題は「国立教育政策研究所」のHPで閲覧できます。

<http://www.nier.go.jp/24chousa/24chousa.htm>

2 本校児童の調査結果

本校児童の調査結果及び分析は以下のとおりです。

(1) 教科の正答率について (※ 全国公立小学校の平均正答率 (以下全国平均) との比較)

国語	学習指導要領に示されている〔知識及び技能〕、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容に基づき、全体を視野に入れながら中心的に取り上げるものを精選して出題	C
算数	学習指導要領における、「数と計算」、「図形」、「測定」、「変化と関係」、「データの活用」の各領域に示された指導内容からバランスよく出題	C

☆ 全国平均正答率との比較について

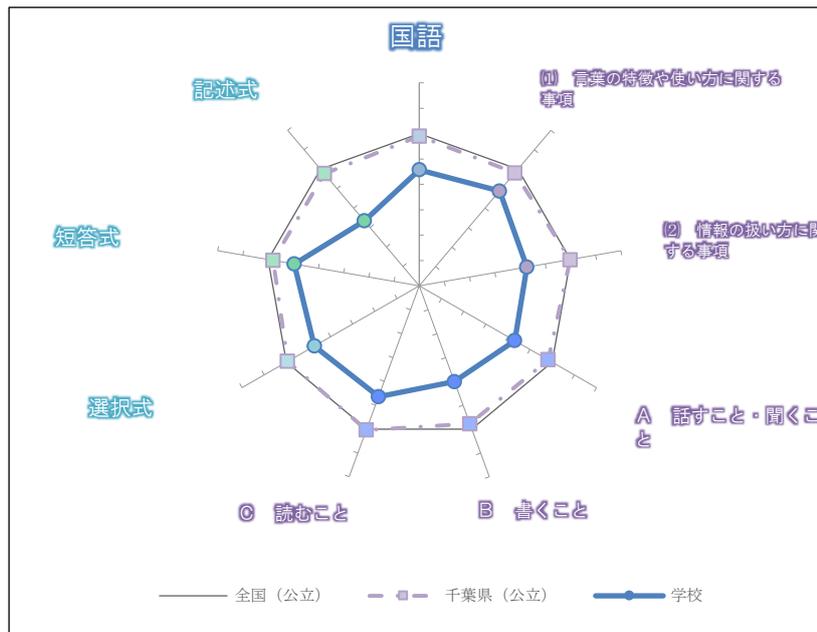
A：+5.0%より上回っている場合「良好」

B：+5.0%～-5.0%の場合「ほぼ同じ」

C：-5.0%より下回っている場合「要改善」

(2) 教科ごとの分析

国語



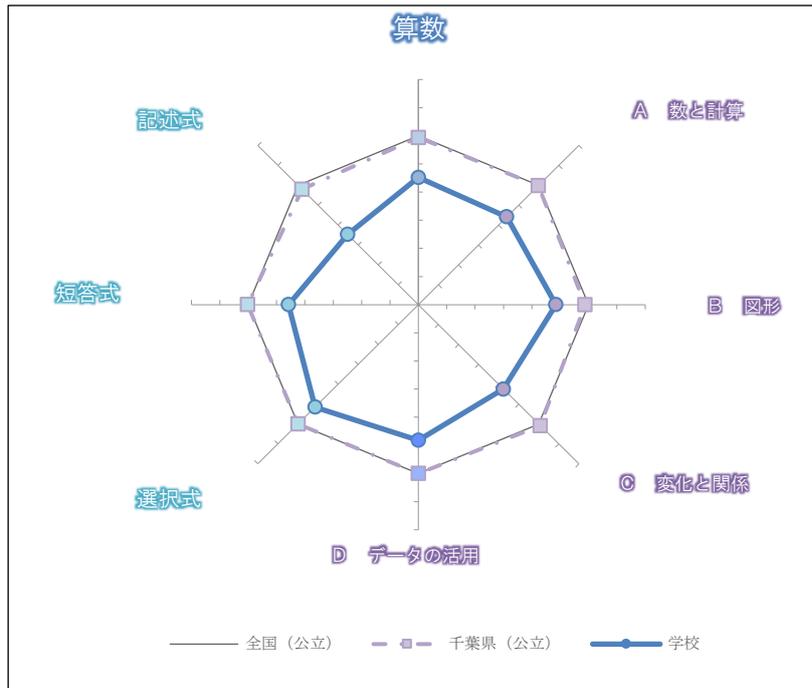
【特徴と現状】

- 全体的に、全国平均と比較して正答率が下回っています。
- 「A 話すこと・聞くこと」の領域では、資料や材料を集めて分類・関連付けを行い、それをもとにして他者と意見を交換することに課題があります。また、目的に応じた情報の整理や活用に課題があります。
- 「C 読むこと」の領域では、登場人物の人物像を具体的に想像することが難しく、読解力が十分に発揮されていません。
- 「B 書くこと」の領域では、特に正答率が全国平均を大きく下回っています。正答率が全国平均を大きく下回っており、特に図表やグラフなどの情報を活用しながら、自分の考えを整理して作文することに大きな課題が見られます。さらに、伝わりやすい表現を工夫する力も不足しています。
- 「記述式」「短答式」「選択式」形式の正答率は共に全国平均を下回っています。特に、「記述式」形式で出題された問題の正答率が著しく低いです。記述式の問題にはそもそも取り組まない様子が見られ、文章を書くことへの抵抗感を強く抱いていることが考えられます。

【改善方策等】

- 「話すこと・聞くこと」については、資料を使って議論を組み立てる練習や、具体的なテーマに基づいたディスカッションの機会を増やしていく必要があります。各授業で自分の意見を交流する時間や、立場に分かれて議論する時間を多く設けていきます。
- 「読むこと」については、読書中に登場人物の感情や背景を深く考えるような指導、想像力を働かせる質問や課題を設けることで、読解力の向上が期待できます。また、学年に応じた読書活動が進められるように、学校図書館司書と連携を密に図っていきます。
- 「書くこと」については、グラフや図表を使って説明する練習や、自分の考えを段階的に整理し、伝わるように書く練習が必要です。これにより、表現力や構成力の向上が期待できます。そのため、簡単な短文を「何文字以内」と条件で要約する練習や、目的をもって書くことや、どのように書けばよいのか推敲することのよさなど振り返る時間を設けていきます。各教科の授業においても、書く場面を設定し、どのように書けば読み手に目的や意図が伝わるかという指導をしていきます。

算 数



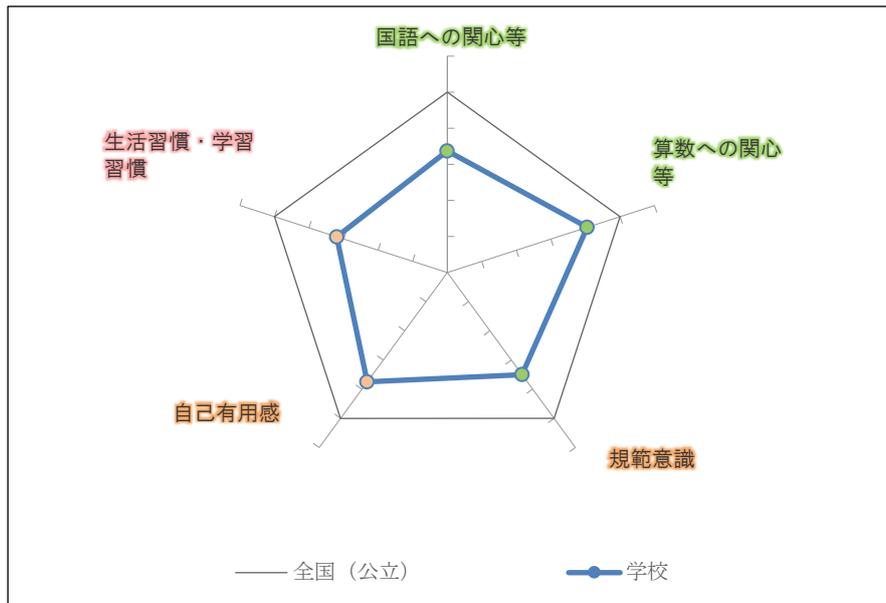
【特徴と現状】

- 全体的に、全国平均と比較して正答率が下回っています。
- 「A 数と計算」の領域では、全国平均を大きく下回りました。特に、除数が少数である場合の小の大きさの関係についての理解や、除数が小数である場合の除法計算をすることが著しく低く、除法が身についていないことがわかります。
- 「B 図形」の領域については、正答率が全国平均を下回りました。特に円や球の直径の長さや円周の長さ、面積や体積を求めることに課題があります。
- 「C 変化と関係」の領域では、速さを求める領域に関して、特に正答率が低いです。道のり・速さ・時間の概念や、二つの量の変化の関係について理解ができていないことが考えられます。
- 「D データの活用」の領域では、示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、違いを言葉と数を用いて記述することに課題が見られます。
- 記述式の問題については、正答率が低い傾向にあります。

【改善方策等】

- 「A 数と計算」の領域については、除数が少数である計算問題を多く解かせ、数の関係を視覚化できるように図や数直線を活用して教えます。これにより、数値間の関係性を視覚的に捉える力を養うことができます。また、実際の生活シーン（買い物や単価計算など）を例にして、除法の概念を身近に感じられるように指導し、除法の必要性を認識させることで理解を促進します。これからもドリル学習や『とみの国』検定の四則計算、百マス計算などを通して、基礎・基本的な問題が確実に理解できるようにします。
- 「B 図形」の領域については、円や球の具体的なモデル（物理的な円や球）を使って、直径、円周、面積、体積の関係を視覚的に説明します。また、公式の単なる暗記ではなく、その成り立ちや意味を説明する授業を行い、なぜその公式が有効なのかを考えさせるようにします。
- 「D データの活用」の領域では、実際のデータを用いた課題（例えば、気温やスポーツデータの分析）を活用し、データから情報を引き出す力を養います。

(3) 児童に対する質問紙調査の結果及び分析



【特徴と現状】

- 「国語」「算数」とともに勉強が「好き」と回答している児童の割合は、全国平均を下回っています。しかし、「算数の授業授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えているか」という質問に対しては、肯定的な回答している児童が多く、学びの必要性を感じていることが分かります。
- 「将来の夢や目標を持っている」「人の役に立つ人間になりたい」「学校に行くのは楽しい」と回答した児童の割合が比較的多いことから、仲間と共に粘り強く目標に向かって生活を送っている児童が多いことが分かります。
- 「規範意識」や「生活習慣・学習習慣」の正答率が平均を大きく下回っています。学校での基本的な生活習慣や学習習慣の定着を図っていく必要があると強く感じます。

3 まとめ

- 学校や家庭で、日々の学習や生活習慣を意識的にサポートしていきます。特に、毎日の自主学習の時間を推進し、定期的な振り返りを行う習慣をつけることで、学習への取り組みを安定させていきます。
- 学習内容を児童の興味に結びつけ、実生活に関連した問題や活動を通じて、学びが日常生活に役立つことを示すことで、興味を持たせていきます。
- 小数や除法など、基礎的な計算力に課題が見られるため、これらの基礎を徹底して復習し、演習問題を数多く行っていきます。実生活での除法の応用例（買い物の計算など）を取り入れ、指導の効果高めていきます。
- 学習や生活の中で、小さな成功体験を積み重ね、生徒の自己肯定感を高める取り組みを行います。児童同士で褒めたり認めたりすることで、学びへのモチベーションを高めていきます。
- 集中して学習に取り組むことができる学習環境づくりや、学習規律の確立を全校で統一していくことについて、継続して指導してまいります。